

# ホルムスク紀行

林 宏 匡

昭和六十三年三月十六日、全国樺太連盟会員であった林藤丸が享年八十三歳にて他界して以来、情報が途絶えていたが、平成五年、サハリン・ホルムスク（旧樺太庁真岡町）に昭和二十年八月二十日のドンパチの時に亡くなった方々の鎮魂の碑が建立されるので、全国樺太連盟が寄付金を募っていることを姉から報らされて申し込みをさせて頂いた。「ドンパチ」とは昭和二十年八月二十日、日本が無条件降伏をした五日後に当る日に、殆ど無防備の状態に在った真岡がソ連の海軍による激しい艦砲射撃とソ連軍の上陸によって町の大半が焼却し多くの住民が生命を失った忌まわしい日のことを、辛うじて生き残った住民（筆者も含めて）達が言い慣わして来た慣用語のようなものであることを付記して置きます。その後、再度二人の姉達から電話があり、平成七年には樺連（全国樺太連盟の略称）が鎮魂の碑除幕式参加旅行団員の

募集をしているので参加することにしたが一緒に行く気はないかと誘われた。当然、小生も喉から手が出る思いであったが、仲々予定が噛み合わず断念することにした。そして、何時の間にか十三年が過ぎ去ってしまった。

思えば、ドンパチの時に一家七人、一人の犠牲者も出さず、昭和二十二年五月、雲仙丸にて内地引揚げが叶ったのは幸運であったと言っほかはない。引揚げ後、父の職場が決まるまで、二ヶ月余り、郷里の福岡県遠賀郡中間町（現在、中間市）に滞在して近くの沼地で鮎釣りをしたり、泥鰌や目高掬いをして過ごした。父の勤務先が島根県松江市の国立松江病院に決まった為、松江市で生活することになった。そして、当時は住宅難で病院に増築された木造の病室の一室を借りての一家七人の生活であった。小生は中学一年の転校生として二学期から学校区の乃木村立中学校に通学することになった。樺太から引揚げて一学期の授業を受けずに行き成り二学期からの入学であったため、方言の理解と英語の勉強には少々苦労した。方言は遊びの中から自然に身に着いたが、英語は父からの特訓で三学期には何とか級友に付いて行けるようになった。今尚、産婦人科医としての忙しい身で暇を見ては英語を教えにくれた父への感謝の気持を抑えることができない。

中学二年からは松江市朝日町に木造二階建ての引揚者用の市営宮の沖アパートの一室（十畳）を借りることになったた

め松江市立第三中学校に転校した。十畳一間に一家七人の生活は「親の心子知らず」の譬え通り、両親の苦勞を他所にして気軽にアパートの友達の所に遊びに行ったり共同の縁側を兼ねた長い廊下に座って将棋を指したり、台無しピンポンを考案したりして楽しかったものである。

その頃から、小生達より少し遅い船で引揚げて山形県に帰郷した真岡第一国民学校時代の親友、後藤幸一君と文通を交して励まし合っていたが、その後、小生が松江高校に入学してから、当時、松江市では初めてという鉄筋コンクリート三階建の緑ヶ丘アパートが西津田町に建ったというので、母が早速市役所に行き申し込んだところ抽選に当り、漸く間数六畳、四畳半、三畳の三間のある住居に入ることができた。將に天にも昇る心地であった。後藤君との文通は小生が島根大学入学後も続いていたが、小生が出した手紙が住所不定で返送されて来てからと思うが何時の間にか途絶えてしまったのは残念であった。

昭和二十八年、島根大学文学部入学後、昭和三十一年、鳥取大学医学部三年に編入学して昭和三十五年に学生結婚をし、昭和三十六年、東京都立大久保病院にてインターン修練後、昭和三十七年、東京大学医学部大学院入学及び医師国家試験合格、昭和四十一年、学位(医学博士)を取得したが、その当時から左翼の青年医師連盟の動きが活発化して今後の

進路を決めかねている時に、当時、国立療養所松江病院長であった父宛に根室市在任の根室保全病院長、江村彰先生から内科医を募集しているが、仲々見つからないので何方かを紹介して頂きたいとの便りが届いたということで江村先生の苦勞を考えて義理を立てるのには小生が最適と感じたらしく、一年間で良いから手伝いに行つて上げて欲しいとの便りを受けた。妻を説得して二歳半になる長女と生後九ヶ月の次女をつれて一年契約で行くことにした。江村先生とは昭和二十年八月二十日のドンパチの時に自決された真岡中学校教官の御長男で、小生らの家の裏手に住んで居られた方ですが、当時は北海道大学医専に在学中で札幌に居たため無事であった方です。昭和四十三年四月から一年間の予定で根室保全病院副院長として赴任したが、後任の目処が立たず、結局五年間勤務させて頂き、昭和四十八年四月、現在地に内科医院を開業し、今日に至つた訳である。

昭和五十一年、漸く開業が軌道に乗りはじめた頃、後藤幸一君(学童期には愛称で「こんちゃん」と呼んでいた)が内地引揚げ後にはじめて拙宅まで訪ねて来てくれた。余りの嬉しさで夜を徹して真岡時代の想い出話に耽つたことが懐かしく甦つて来る。その時に、もし再び樺太へ行くことができるようになったら是非一緒に行くことと誓い合つたのであるが、平成十四年七月に他界してしまつたことは恟に残念というほ

かはない。その後、時々、東京真岡会や真岡一、四校の会に顔を出させて頂きながら、ホルムスク（旧、真岡）を訪問したところのある方々に昔の真岡の面影が次第に消えてゆく様子を窺う度に歯痒さを感じて今日まで過こして来た。

此の度、ホルムスクを二回訪問したところのある弟（樺太生れで小生より一歳三ヶ月年下）から樺連が企画するホルムスク訪問旅行は今回が最後になるかも知れないと電話があり、これを逸すると、平成二十年九月で満七十四歳になる小生にとつては、一生行くことができなくなるかも知れないと思われたので、亡妻の一周忌を迎えただけでありであったが、早目に予定を立てて参加することにした。

今回の旅行団名は「樺太連盟故郷訪問真岡班」ということで、参加者は右に述べた上の弟と小生より九歳三ヶ月年下の樺太生れの弟を含めて十一名の小世帯であったが、家族的雰囲気にも包まれた楽しい旅行をすることができた。

今回の樺連主催の真岡訪問旅行は十四回目ということであるが、小生ら三人兄弟のなかで小生だけが初参加で上の弟は三回目、下の弟は二回目ということなので小生に心ならずも存心が働き、少々気が緩んでいたのか、羽田空港での待合せ場所と時間をすっかり忘れて直接搭乗ロビーに入ってしまった。同行の皆様は気を遣わせて申し訳ないことをしてしまいました。搭乗直前になって小生を探している同行の皆様気づき、弟

に促されて団長の井本さんを紹介されて今回の勘違いの謝意を述べて仲間入りをさせて頂き、ほっとすると同時に今後は皆様に迷惑をかけないように行動しなければと心を引き締めて午後一時十五分発、函館行のＪＡＬ一六五便の座席に着いた。

予定より少し遅れて午後一時三十五分に羽田空港を出発し、午後二時五十四分、函館空港に到着後、バスに乗り、サイネリアの花壇が整然と続く漁火通りを一直線に進み、途中、石川啄木の銅像を海岸に眺めながら函館駅前に到着した。前日函館に到着していた代表世話人の樺連理事、木村滋氏が出迎えて来て下さり、今夜のホテル、東横インまで歩いて向かい、各人チェックイン後、少し部屋で休み午後五時に、東京から団体で来た小生ら七人に個人的に来た三人がロビーに集合し、木村さんの指示に従ってバスにて五稜郭公園まで行き、下車後、五稜郭を見学後、二階の「旬花」にて壮行会を行った。木村さんに夫々の参加者を紹介されて和やかな雰囲気でも美味しい和風会席料理を味わってバスにて来た道を戻り、函館駅前で弟達と写真を撮り合って、駅のコンビニでお茶とヨーグルトを買い、明日のサハリン行きを楽しみに、入浴後早々と寢床に就いた。

翌二十八日は雨模様であったが昨夕の壮行会の余韻のためか目覚めは良く、すっきりした心地で朝を迎えた。午前六時

すぎ起床して軽い腹筋運動後歯磨き、髭剃り等を済まし、身形を調べて七時過ぎ部屋を出ると、世話人の木村さんに遇ったので、これからの予定を尋ねると、今朝は雨模様なのでタクシーに分乗して函館空港に向かうとのこと。一階のロビーに下りると、井本団長、堀江副団長ほか三、四人で朝食中であつた。邦巨（上の弟）は少し遅れて来たが秀臣（下の弟）は早目に朝食を済ませて部屋に戻つた様子であつた。食事はお結びと味噌汁、新香、ジューズ等、簡単な和風ハイキングという感じであつたが、小生にとつては丁度良かった。

食後、家に留守番をしている寿子（三女）に電話をして、無事を確認し合つた後、一旦部屋に戻り、九時三十分チエックアウト後、三台のタクシーに分乗して函館国際空港へ向かつた。空港に着くと空に晴間が見え始めてすっかり雨は止んでいた。十時半頃、サハリン航空のカウンター前のロビーで日本旅行社の担当員からチエックポイント、持込手荷物の重量、内容物、必要書類等の説明を聞き、一連の出国手続きを済まして出発ゲートにて二、三十分待つたが、その間にゲートの売店にて、嘗て弟達にサハリンの水は生で飲むと下痢をすると言かされていたので、リットル入りのミネラルウォーターを二本購入して手荷物とした。

予定通り、サハリン航空（HZN）一四二便にて十二時四十分に出発した。雨雲を突き、機体の揺れも少なく、安定飛

行に入つた時、六十二年振りに訪れる樺太真岡（ホルムスク）の現状を心に描きながら眼下に広がる海をぼんやり見下ろしている。早々に機内食が運ばれてきた。気持が上擦つていたのかスチュワーデスさんの服装は思い出せないが、てきぱきとした仕草で配つていた感触は残っている。食事内容はサンドイッチ、クラッカー、サラダ、オレンジジューズ等で今迄乗つたことのある英国航空やフランス航空の機内食と殆ど変わらず、結構美味しく戴き、食後の眠気を払う間もなくサハリンの大地が見えはじめた。白樺の木々、緑の山々、畝つた川や赤土の目立つ長い道路、点在する家々の全てが手招きするよつに小生の目に映つた。

現地時間の午後三時五十五分（日本時間、午後一時五十五分）にユジノサハリンスク（旧、豊原）空港に着陸。空港は在り合わせに滑走路だけ造つたよつな荒涼とした印象であつたが、数十人の出迎えの人々の顔は明るく夏の日を受けて、開放的に見えた。着後、世話人の木村さんが事前に依頼してくれていた案内人の女性通訳（旧樺太時代に韓国系日本人として育ち、ロシアに帰化した）、イルマさんの上手な日本語に安堵感を覚えながら貸切バスに乗り、一路ホテルへ向かつた。空港から遠ざかるにつれて、殆ど道路の舗装がされていないので、シートベルトを締めていても凸凹道に差しかかるゝと振動激しく脊椎に衝撃が走つたが、イルマさんの説明を聞

き洩らさないようにしながら外の景色を見ているうちに体勢が衝撃に順応して六十二年間心に描いて来た諸事が散逸するよつな心地になって行つた。路傍に群生する大蔭や猪独活は旧樺太時代にも見馴れた風景で、漸く成育の地に帰つて来た喜びを禁じ得なかつた。バスが進むにつれてイルマさんの説明に惹き込まれていった。

終戦後、旧樺太時代の地名がロシア名に変わつてからは、当時繁栄していた逢坂や二股もすっかり寂れてしまつたとの説明を聞きながら、壊れかかつた家屋の目立つ風景を眺めながらドンパチ以前の真岡郊外の豊かな自然を想い浮かべていた。日本統治時代に世界に誇つていた豊真線のループ線は一九九五年の地震で崩壊して廢線のまま放置されて再開の目途は立つて居らず、現在ユジノサハリンスク(豊原)とホルムスク(真岡)を結ぶ公共の交通機関は一日二往復のバスしかないとのことであつた。ホルムスクに近づくにつれて開拓半ばの荒野の街に踏み込むよつな心地でバスに揺られていたが、さすがに街中に入ると高層の建物(と言つても殆どが五階建以下)が道路沿いに軒を並べていた。バスの窓越しに六十二年前の面影を求めて目を凝らしていたが、日本統治時代の欠片も見当たらず失望のまゝ緩やかな坂を上つて五階建の団地群の一角にバスは到着した。

此処が当日(七月二十八日)から七月三十一日まで滞在予

定のホテル・チャイカであつた。部屋はホルムスク訪問経験のある九歳年下の弟(秀臣)と一緒にあつたので常に行動を共にするよつに心がけることにした。このホテルは食堂が使用不能とのことで、チェックイン後、再びバスに乗つて先程上つて来た緩やかな坂(後でこの坂が旧三宅坂であることを知つた)を下り、麓のレストラン・ウエート(「慰め」の意)の前で下車、一行十一人と通訳のイルマさんと共に夕べの食卓を囲んだ。このレストランは普通の民家を改造したよつな平屋造りであつたが室内は窓の内側に七色の虹をあしらつた洒落た薄い半透明のカーテンが張り回らされ家庭的雰囲気醸し出してあり、ほつとした気持であつた。一行の方々も同じよつな気持になつたと見えて通訳のイルマさんを中心に談笑が弾んだ。

前菜の海鮮サラダを食べながら、先ず黒パンを一孤み食べてみたが、ドンパチ当時に味わつた黒パンと異なり、酸味が殆どないことに氣づいた。イルマさんの話では酸味の強い黒パンは現在全く作られていないとのことと味覚の想出が潰え去つたのであるが、最後に出された鱒のムニエルはロシアビール(バルチカ)と合口が良く満喫した。

夕食を終えてレストランを出て見廻すと、このレストランの在る場所が昭和二十年八月二十日に艦砲射撃を受けて逃げる途中、暫時砲声を聞きながら身を伏せた民家の畑のあつた



ホルムスク(旧真岡町)の高浜が丘からタートル(間宮)海峡に沈む夕日を望む

所であることに気づき、胸が疼く思いに駆られた。バスで一旦ホテルに戻り、弟達と一緒に高浜町二丁目の我が家の跡地を確かめに行ったが、五階建鉄筋の集合住宅と拡張された三宅坂に敷き潰されたように変貌して輪郭さえも推し測ること

ができなかつた。夕焼け雲に誘われるままに学童の頃の遊び場となっていた高浜ヶ丘の崖の辺まで歩を進めてタートルの海に沈みゆく夕陽を眺めていると、当時の倂が走馬灯のように脳裏を掠め感涙抑え

難く、六十二年振りに出会った夕陽が潤んで見えた。未だ嘗て遭遇したことのない神々しい日没に熟々「来て良かった」という感慨に浸っている中空に数限りのない燕の群が飛び交っているのに気づいた。

まるで我々との出会いを待ち受けていたかのように薄い茜雲の下に乱舞する飛燕の群を仰ぎ見ては夕陽が水平線の彼方に没し、夕闇に包まれるまで二十二年前に一緒に訪問することを誓い合ったが、約束を果たせないまま今日を迎えた亡き後藤君を想いつつ立竦んでいた。

日没後、腕時計を見ると、午後九時を過ぎていた。またホルムスク訪問第一日目であるというのに、今眺めた夕陽以上の感動に出会うことがないような心地で近くの小さなマガジンでお土産用の燻製の鯨を買ってホテル・チャイカに足を向けた。

ホルムスク訪問の二日目(七月二十九日)の朝は薄曇りであったが、すっきりした気分で六時過ぎに目が覚めた。昨日夕食をしたレストラン・ウユートの前に集合し、七時に朝食《ロシア風コンチネンタルブレイクファストと言った感じの三種類のフレイプ(パン)、粘ったカルトーフエリ(馬鈴薯)、ピーマン、レタス、インスタントコーヒー等》後、嘗て亡父が勤務していた旧真岡医院跡地(現在はホルムスク市文化会館が建っている)へ弟達と足を向けた。

日本統治時代は真岡医院前は、なだらかな坂道となつて両側に日本家屋（真岡支庁官舎）が建ち並んでいたが、今はこの坂道には大砲や錨が記念建造物として置かれて戦勝記念公園に成り変わり



文化会館（旧真岡医院跡地）を背景に戦勝記念  
広場にて（左から弟の邦貞、筆者、秀臣）

昔の面影は全く見当らなかつた。悔しさを抑えながら弟達と文化会館を背景にスナップ写真を撮り合つた。その後、同行の加藤さんも加わり四人で真岡神社跡地まで歩くことにした。途中、学童の頃に下校時度々道草を食つた神社へ向かう

坂道の麓に在った公園に立ち寄ると、そこは英雄通りの辻公園と名称が vari、昭和二十年八月二十日の戦で亡くなつた連軍の兵士を弔う記念碑が建てられていた。旧真岡神社へ向かう坂道（山手通り）の脇に校門の石の台座が辛うじて残っているのを加藤さんが見つけてくれた。

遠く離れていた親友に会つたような心地で真岡第一国民学校の在った敷地内に入ると、丁度、中年のロシア人男性が後から来たので、此処に建てられている建物の名称を訪ねると、技術専門学校とのこと。ドンパチ以後、真岡第一国民学校はソ連軍の兵舎として使われていたが兵士の失火で全焼した。当時、小生らの家族は本町の保全病院二階に真岡医院の職員の家の方々と共に収容生活を送っていた時であつたので、二階の窓から自分の母校が焰に包まれて焼け落ちる様子を地団駄を踏んで眺めていたが、その翌日に是非焼跡を自分の目で確かめたくなつて出かけて行き、何時までも燻り続ける母校の残骸を目の当りにして哀しかったことが忘れられない。

更に坂道を上り、真岡神社の跡地に行くと、石段の中央部は花壇に姿を変えていたが両側は当時の面影を留めて今も利用されていることに幾らかほっとした気持になつたが、石段を上ると神社跡にはサハリスコエ・モルスコエ・パロホツツボ（樺大海運会社）の四階建てのビルが建ち、向つて左手には美しい庭園が造られてホルムスクでは最も自慢できる風



旧真岡神社跡の浄水槽の傍らで（左から）弟の秀臣、邦亘、筆者

園に置かれている「浄水」と彫込みのある石造りの浄水槽に案内された。これは学童の頃、初詣に行く度に手を浄めた真岡神社のものであった。

当時の真岡神社の情景を想い浮かべながら次に案内されたの

情を見せていた。見廻すと石段の上り詰めた所の両側に狛犬の台座があるのに気づいた。其処

には雛菊の鉢植が置かれていた。左手の庭園の入口で中東系のロシア人と思われる瘦せた色黒の職員が手招きしているのに気づき、行って見ると庭

は、神宮山の山道の道標となっていた馬頭観音の彫込みの馬頭」の所だけが読み取れる石の台座であった。精一杯、日本人の想い出を掘り起こすために此の様に気を遣ってくれた職員に対して感謝の気持ちを込めて「オーチエニ・スパシーボ」と言つて穏やかに尻ぐタタールの海に目を遊ばせながらホテルへ一旦引き返して少し休息をとった。

九時三十分、一行十一人は通訳のイルマさんと一緒にバスに乗り、樺太海運会社の石段の前で一旦下車して、皆と共に再度先程と同じ順路で想出を辿り、表敬訪問先のホルムスク市庁へ向かった。

十時、ホルムスク市庁着後、早々にグスト市長が一行を会議室に招き入れてくれた。職員の見守るなかで井本団長が訪問の目的と温かい職員の方々の歓待に対しての感謝の気持ちを伝えると、グスト市長も歓迎の言葉を述べて下さった。市長は世界港湾都市会議のため神戸を訪問したことがあるとのことで、日本には良い印象を持っているようであった。通訳のイルマさんを通して一行からの質問を促されたので、小生の職業柄、医療施設等の質問をさせて頂いたが、ホルムスクには二十三の診療所が在り、市民は充分にその恩恵を受けているとの答であったが、医療面の質問に対しては控え目に答えている様に感じた。

一行はホルムスクの宣伝用機関誌「モールスコエ・パロ」



タ・サハリーナ」を手渡されて皆でお礼を述べ合い、市庁前に待たせてあったバスにて鎮魂の碑前祭のため、シコールナヤ通り小公園（旧高浜町の丘）へ向かった。バスが旧三宅坂を上るにつれて薄く日が差しはじめて鎮魂の碑の前には我々を歓迎するかのよう

に碑に刻まれた「鎮魂」の二文字の深い陰影が初めて見る小生の心に迫り、言い知れぬ哀悼の情が込み上げて来た。

十一時過ぎにロシア正教ビクトル神父と市長秘書ナターシャが到着したので、一行は碑前に神父を囲む様に弧状に参列し、神父の厳肅な祈祷に頭を垂れて昭和二十年八月二十日、



鎮魂碑の前で通訳のイルマさんが献花台の位置を指示してくれた

ドンパチの時に犠牲になった方々の御冥福を切に祈った。前回訪問までは日本から真言宗の僧侶が同行して読経が行われたとのことであったが、今回は世話人の木村さんが持参して



慰霊祭の準備中にビクトル神父と（弟秀臣Ⓞと筆者）

くれた般若心經のテープを神父の祈祷の後で流して、一行を代表して井本団長が線香の束に焼香し、碑前に捧げて皆で合掌し再度、犠牲者の方々の御冥福を祈って碑前祭を終えた。

その後、ビクトル神父は家用車で一旦帰られたが、秘書のナターシャはバスに同乗し、旧王子製紙工場跡地まで行き、其処で下車したが瞬く間に見えなくなつた。イルマさんの話では此処がナターシャの住居とのこと驚いた。廃墟同然と

なっている旧王子製紙工場（写真⑤）の敷地内の何処が住居  
になっているのか全く見当が付かなかった。



前中に表敬訪問をした時に会ったグスト市長が演説をしてい  
るところであった。人が集まっているというより通行人が買  
物が散歩の途中に立ち止って聞いているというような風景で  
あった。日本では選挙の時だけ演説をすれば良いがロシアで

ナターシャを下ろ

した後、バスは「セ  
ジモエ・ニエーボ」

というレストランに  
向かった。レストラ

ンは丁度ホルムスク  
市庁の真正面であっ

た。何処かで見たと  
のある禿頭の体格

の良い白い半袖シャ  
ツ姿の男が、ニメー

トル位高く設えられ  
たレストラン入口の

ポーチで大声を張り  
上げているのに出会

った。良く見ると午

は此の様に市長になった後でも所信を肉声で伝えて市民の心  
を捉え続けなければ要職は務まらないことを知った。昼食に  
平目のムニエルを美味しく頂き、バスにてソヴィエツカヤ  
通りを海浜公園（旧北浜町）へ向かった。

海浜公園（プリモールスキー・プリパール）は真岡にソ連  
軍が上陸した記念碑が建てられて在り、先端の一つ星が誇ら  
しげに輝いていた。この公園には親子連れも多く、子供達が  
ミニカーに乗っている姿を見ながら楽しそうな親達の表情は  
至福の喜びに満たされていた。この情景に、小生はすっかり  
異邦化してしまった成育の地で日本時代の幼少期の記憶を呼  
び起すには余りにも時が経ち過ぎていて空しさを覚えた。マ  
リーゴールドの花壇のある遊歩道に沿って弟達と一緒に幼少  
期の夏の想出を語りながら歩いて公園内のマーケットでカメ  
ラのフィルムを買い、午後三時十五分頃、皆でバスに乗って  
ホテル・チャイカに戻り、休息を取った。

午後六時、レストラン・ウチヨス（巖の意）でホルムスク  
訪問記念レセプションを行った。一行十一人とイルマさん、  
来賓として鎮魂の碑の前で祈祷をして下さった神父のビクト  
ルさん、市長代理として秘書のナターシャさんと市庁職員の  
アンナさんの合計十五人出席した。来賓の三人の方々に並ん  
で席を取って頂き、ナターシャさんの前に席を取った団長の  
井本さんから来賓の方々への感謝を込めた挨拶の後、副団長

の堀江さんの乾杯の音頭で開会。本格的なロシア料理を味わいながら歓談した。

世話人の木村さんに促されて先ず小生が「ふるさと」を自訳ロシア語で歌ったが、三人の来賓から「オーチェニハラシヨー」と褒められたので天にも昇る心地であった。その後、弟（邦巨）がボルガの舟歌を原語で歌い、これも喝采を受けた。副団長の堀江さんも負けじとトロイカを原語で歌い大いに盛り上がり、来賓側も加わり、カチューシャ、アガニヨーク（灯し火）等の合唱となり、レストランのウエイトレスも嬉しそうであった。

小生の隣席は神父のピクトルさんであったので年齢を尋ねてみると四十七歳とのこと、聖職故か年齢より老けて落着いて見えた。七十四歳の小生を若く見えると言ってくれたが、むしろ軽佻浮薄に見えたのかも知れない。会終了後、ロシア風挨拶（三回頬を交互に付け合う）にて別れを惜しんだが、頬髭を蓄えたO氏はナターシャさんとアンナさんに頬にお別れのキスをして貰ったと得意気であった。ロシアの女性は髭面の男性に好意を抱くことをO氏は以前から知っていたのでしようか、残念ながら聞きそびれてしまった。

会は午後八時にお開きになったが未だ日没には間があるので、皆で旧真岡駅に足を延ばした。嘗て、上野駅を模して建てられたスマートな駅舎は一九九二年に老朽化のためとホル

ムスクの中央駅がホルムスク・セベロ（旧北真岡）に移されたこともあって取り壊されて、今では空地にコンクリートを敷き詰めた様なプラットホームだけが残り無人駅になっていた。

昔の面影を追いながら弟達と写真を撮り合っていると夕暮の薄明の中をヘッドライトを点けて三両編成の列車が到着した。標示を見るとトマリ（旧泊居）行きであった。数人の客が下車するのを白襟の黒っぽい制服を着た女性の車掌が列車のステップに立って見届けると列車は徐ろに出発した。下車した乗客達が列車が通った後の線路上に沿って歩いて家路に向かう後姿に素朴な生活が滲み出ていた。その後、跨線橋を渡り、右手に夕暮れの薄明のなかに淋しに廃墟を晒す旧王子製紙工場を眺めながらホテルに向かう途中にマガジンで練の燻製を買った。

午後九時三十分頃、弟（秀臣）は早々と床に就いたが、小生は外で大声で騒いでいる若者の声が煩いので、シャワーを浴びて暫く起きていた。十時半頃寢床に就いたが一晩中騒音と顔に群がる蚊に悩まされて熟睡できなかった。翌（七月三十日）朝、六時三十分頃起床して窓越しに外を見ると窓が一個所開け放しになっているのに気づいた。昨夜の蚊の原因が判ったが後の祭であった。起床後弟が副団長の堀江さんにこの事を話すと蚊取線香を恵んで下さったので、今夜は蚊の残

党退治にこれを焚いて寝ることにした。

七時にレストラン・ウユートで朝食を済まして弟達と真岡川流域に沿って文化会館(旧真岡医院)の裏手の方に行つてみたが、川幅は極端に狭くなり広い所でも一、三メートル位で幽かな水音を立てているが、川と言つより溝か下水と言つた方が良い位に旧三宅坂と文化会館の間に造られた広場の下の暗渠に流れ込んでいた。この流れは旧三宅坂の下からレストラン・ウユートの裏を通つて、旧王子製紙工場から引かれてゐる給湯管と線路の下を横切り、ソビエツカヤ通りを截断して間宮海峡に注いでゐる(その為か、この旧真岡川はロシア語でセチカ(截断)川と名付けられている)。

昔の面影がすっかり消えて狭い汚れた川に幻滅を感じながらドンパチ以後、当時、真岡医院長の山岡先生の住んで居られた官舎に小生ら家族七人が住まわせて頂いていた文化会館の向かつて右手の敷地に足を運んだ。この官舎は山岡先生の御家族三人が住んで居られた家であるが、ドンパチの一日前に山岡先生だけを残して奥様とお嬢様が北海道に引揚げたため山岡先生はホルムスクゴスピタリ(病院)の一室で暮らした方が便利とのことで小生らが住まわせて頂くことになつた家です。その当時は院長官舎らしく一階建の門構えの立派な洋風の外觀で十畳二間と十一畳の洋間、四畳半一間に広い中廊下、広い台所、日本式浴場、納戸部屋等があり、ソ連から

の一般人が入植しはじめてからはゴスピタリの女性事務長家族三人と産婦人科の女医と同居することになった。

小生らの住居の在つたこの敷地から見る風景も旧真岡医院周辺の面影を追うに足るものは皆無であつたが、弟達と敷地の一角にある虎杖の茂みを背景にスナップ写真を撮り合ひながらドンパチ以後に想像を走らせて話を交しているうちに當時の情景が走馬灯の様に脳裏を掠めて行つた。

当時十五歳の金髪のリーラ(事務長の娘)が母親の匿し置いていたウオツカをこつそりと飲んで上機嫌で居間に入つて来て、小生が塩昆布をしゃぶつてゐるのを見ると「シト・クーシャイチエ」と訊いたので黙つて一本渡すと大笑いしながら「シト・エータ、シト・エータ(これは何、これは何)」と言つて小生の真似をしてしゃぶつていたこと、小生より一歳年長の姉(伸子)の作つたトランプで、ばば抜きやツーンジャック、七並べ、神経衰弱等の遊びを姉弟で、時にはリーラや妹のツビヤータも加えて楽しんだこと、小生の庭に紛れ込んで来た豚を追い出そうとしてお尻を叩いた時の手の平の痛かつたこと、窓から雪景色を眺め過ぎて雪目を患い毎日硼酸水に浸した脱脂綿を箸でつまみ何度も眼を洗つたこと等が走馬灯のように脳裏を掠めて行つた。当時のことを回想しながらホテルに戻り、バスの出発まで少し時間があるので函館空港の売店で買つてきたミネラルウォーターを飲み、テレ

ピのスイッチを入れたが散乱画像で何も映らなかつた。恐らく部屋らしく見せるために唯置いてあるだけと思われた。

今日(七月三十日)は旧広地(プラウダ)の鮭の孵化場を見学後、旧羽母舞(ピオニエルカ)原野でバーベキューの予定で九時三十分頃、バスで出発した。荒廃した王子製紙工場を過ぎると右手の海岸線に鉄錆びた車輛や鉄柱が放置されたままに在るのを虚しく眺めながら、その向こうに視線を移すと白波の立つ青い海が学童の頃の想出を誘った。バスが進むにつれて海浜の風景が拡がって行つた。

想えば国民学校一、二年生頃の夏休みに同級生の江村豊ちゃんの家族と一緒に手井の海岸に行つたことがあつた。夏の盛りであつたが乾燥した流木の焚火に、浜に転がっていた硫黄を焼べて体を暖めては海に入って昆布や紫雲丹を漁つて来て焼いて食べた記憶や時々ポンポン船が小さな煙突から白いドーナツ状の煙を吐きながら沖へ向かつて行くのを見ながら食べた梅干の握り飯の味、日本女性としては背の高い母が白い肌襦袢を着て長い昆布を肩に掛けて海から上つて来た時の嬉しそうな顔、浜に飛んで来た黄金虫を捕えたことなどが懐かしく甦つて来た。

豊真線の踏切りを過ぎると手井の海が広々と開けて見えたが舗装をしていない凸凹道を土埃を舞上げながら殆ど廃屋に近い幾つかのダーチャ(別荘)を左手に見ながらプラウダの

鮭孵化場に到着した。腕時計を見ると十時十分であつた。日本時代の孵化場をそのまゝ使用しているのを見てKさんは当時の孵化場の事情を良く知っていたためか非常に残念がつていた。日本人から教えて貰つた技術に対する感謝の気持が説明のなかに全く伝わって来ない、とのことであつた。係員の説明を聞いて周辺の荒地に咲く月見草や大踏に目を遊ばせながら散策して十一時過ぎにバスに乗り、同じ道を引き返した。途中、副団長の堀江さんに日本時代の広地は大規模な銀狐の飼育場が在つたという話などを聞くうちにウソーバヤ(手井)の標示があり、海は益々青みを増し、沖合には貨物船が一隻遅々とホルムスク港に向かつているのが見えた。

モーレスコイ・バクザールの二階のレストランで昼食(平日定食、ボルシチ等のロシア料理)を終えて午後一時二十分、ソビエツカヤ通りを北へ向かつてホルムスク北駅を過ぎると左手の海辺で幾人かが海水浴をしているのが処々に見えたが、廃墟同然の工場や五階建のビルが目についた。群生する虎杖や可憐な浜梨の花々が散在する荒野の一本道を暫く行き、ピオニエルカ(羽母舞)の標示のある無人駅の前でバスは止つた。運転士さんが近くに居合せた人に道を尋ねて線路沿いに更に北へ向かつて午後二時三十五分に下車後、皆で、這松や高山植物を踏み分けてバーベキューに適した処に陣を布いた。バーベキューの用意は世話人の木村さんが予め頼んでくれて

いた若い調理人(男二人、女一人)にお任せして我々は海岸まで散策した。霧模様の曇日のため「女の子山」が霞んで見えた。

季節的に少し早かったのかフレップの実が何処にも見当たらなかったのは残念であった。通訳のイルマさんは裸足で曠野の感触を楽しんでいた。弟(秀臣)は波打ち際から昆布を拾って来て生れ故郷の海の感触を手で味わっていた。三十分位でバーベキューの用意が整ったので、団長の井本さんの音頭で和氣藹々の会が始まった。程良く焼き上がった牛肉や鶏肉を故郷の原野の大きに包まれながら味わう喜びを今迄生かされて来た感謝の気持ちで噛みしめていた。酌み交すバルチカ(ロシアビール)の味も喉に沁みて皆夫々の感慨に浸っていた。小生は国民学校一年生の時の遠足で羽母舞原野にフレップ狩りに来た時、集合写真撮ることに気づかず座っていると探しに来た佐々木先生にいきなり後から抱き抱えられたのでびつくりして泣き喚いたことを想出してしまった。

バーベキュー(ロシア語ではシャシルイク)の用意をしてくれた若い調理人にお礼を言って、午後六時過ぎに想出尽きぬ原野を後にした。途中、団長の井本さんの生家のあったところの標示のある門の前で井本さんのスナップ写真を何方かが撮って上げて再出発。ホルムスク市内に入り、ポーチタ・ロツシー(ロシア郵便局)前で、此処から歩いてホ

テルに向かうという井本さんと清野さんを下ろして、午後七時頃ホテルに着いた。ドンパチの時、最後まで職場を守り通して「皆さん、さようなら、これが最後です」の声を残して青酸カリを飲んで殉職した電話交換手の九人の乙女が働いていた真岡郵便局は取り壊されてしまったが、同じ場所にロシア郵便局が建てられたと聞かされて小生も井本さん達と一緒に下車して殉職した九人の乙女達の職場の在った所で手を合わせて祈りを捧げるべきであったと自責の念に駆られた。

ホテルの自室で少し休んだ後、午後八時に団長の井本さんの部屋に皆で集まり、ビールやジュースを飲みながら歓談したが、明日はホルムスクを離れるのかと思うと名残り惜しい気持ちで一杯になった。何しろ、生後半年で真岡に渡り、十三年間暮らした成育の地である。十三年間積み重ねられた想い出を辿り、その面影を追うには既に異国の地となり、しかも、六十二年間の空白があつては余りにも懸け離れ過ぎた。しかし、もつ少し、納得の行くまでホルムスクの市内を見て廻りたい気持ちであった。

七月三十一日(木)は六時過ぎに起床。昨夜は副団長の堀江さんから頂いた蚊取線香のお蔭で蚊に悩まされず良く眠れた。七時十分頃、昨日同様、ウユートにて朝食を摂った。小生の向かいに通訳のイルマさんが座ってくれたのでロシア語の微妙な発音の仕方や聴き分け方を教えて貰ったり、始終イ

ルマさんに付き添って我々の荷物の上げ下ろし等をしてくれた若者（セミヨン）は将来観光に関する職に就くために専門学校に通学中であることやイルマさんの甥御が五ヶ国語を話す語学の達人で同時通訳として政治家に重宝がられていることなど話を伺っているうちに食事時間が過ぎてしまった。

食後兄弟三人でドンパチ以前に住んでいた高浜町の跡地まで行き、崖の上から曇日の下で鉛の様に静かなタートルの海（間宮海峡）を眺めながら当時崖の中腹に「悲恋塚」という立派な碑が海に向かって建っていたことを想い出した。この塚は愛する女性を真岡に残して出航した船長が海難事故に遭って不帰の人となったのを知らずに、毎日この崖に来ては海を眺めていた女性が独り淋しく亡くなったのを弔うために建てられたと聞いていた。学童の頃は夏休みの晩には必ず肝試しをして遊んだが、その時、一番怖かったのは「悲恋塚を一周して来い」と上級生に命令されることであった。弟達と崖に生える虎杖の繁みを分けて自然に出来た道を途中まで下りてみたが、碑の痕跡さえ見当らなかつた。

余り時間も無いので三人で渋々崖を背にして五階建の集合住宅の間の道を通ってホテルに向ったが、荒れ放題の庭には妙に牛蒡の花ばかりが賑々しく咲いていた。紙くずやプラスチック容器が散らし放題になっている道路脇の広場には野犬が戯れていたが、薄汚れた作業服を着た中年のアジア系ロシ

ア人男性が無気力に広場の芥を掃いている姿が何気なく哀れに見えた。ホテルに戻って少し休み、午前九時、ホテルの庭に咲くマーガレットやルピナス、薊などの花々を愛でながらバスに乗り、ホテル・チャイカに別れを告げて、ソビエツツカヤ通りを北に向かう。

夏の間だけ運行されるダーチャ専用列車「イルマさんの話」や土台のコンクリートの壁に青いペンキを塗っている作業服姿の婦人を右手に見ながら、旧あさひが丘方面の道を右折し、木村さんからグズベリの茂みで遊んだ憶出を聞き、旧女学校は技術専門学校に建て替えられたが校庭は今も使用されているとのことであった。木村さんの母校である旧真岡二校の跡地をバスから眺めてウターンし、旧熊笹峠へ向かう。その間、木村さんが奉納相撲で三敗した話や熊啄木鳥に家の板壁を突き貫かれた話、日本が無条件降伏をした時、スターリンが北海道の留萌と釧路を結ぶ線で日ソ国境を分けると持ち出した時にトルーマンが断固反対して、その時から既に冷戦が始まっていたこと、旧熊笹峠の大砲が日本の方に向けてあることなどを話してくれた。

次いで清野さんの話に耳を傾けた。冬の真只中に平野先生の引率でスキーを履いて熊笹峠まで行進させられた時にヒュッテの中で凍えながら弁当を食べた話、金田沢で岩魚を釣った話、鯨の群来した時に白子でタートルの海一面が真白にな

つたのを神宮山から見た話、中学三年の時に近代的に見えた花街の芸者さんの部屋に食用蛙が飼われていた話などを聞きながら旧熊笹峠に到着した。ドンパチの時、最後の激戦地となり、日ソ両軍に多くの犠牲者が出た所だけに敬虔な心でバスから降り立った。バスの中で木村さんが話していた一門の大砲を頂いた戦勝記念碑が誇らしげに荒地の中に聳えているのを見ると、この地を守るために最後まで戦って亡くなった日本の兵士たちの無念さを思わずには居られなかった。

熊笹峠に向かつて蟻の群れのように登って来るソ連兵を機関銃で狙い撃ちしたといわれるトーチカの入口に夫々の思いを込めて線香に火をつけて並べ、木村さんの持参した般若心経のテープを流し、皆で合掌をして慰霊祭を行った。その後、バスの出発まで少し時間があつたので、一行は各自で周辺を散策した。曇り日の下でタートルの海の彼方を眺めたり、熊笹や路の茂みに目を遣って幼少の頃の想出を辿ったり、スナップ写真を撮り合っているうちにバスに乗る時刻(十時十分)となつた。名残りを惜しみながらバスに乗り、ユージノサハリンスク(旧豊原)へと向かつた。途中、二、三頭の牛を飼っている小さな牧場や玉蜀黍畑が目についた。十時三十分頃、リユータカ(旧留多加)の標示が立っている白詰草が一面に生えている野原が見えると、急に日ざしが明るくなった。やがて、リユータカ橋を渡り、ユージノサハリンスク二十八キ

口の標示が過ぎると再び日が翳りはじめ少々眠気がさして来た。イルマさんの声で十一時三十分頃、ユージノサハリンスク市内に入ったことが判つた。

此処でも日本時代の神社仏閣は全て壊されてしまつたが、日本時代に造られた碁盤の目の様な街並みはそのまま残つているとのことであつた。ユージノサハリンスクとホルムスクを継ぐ鉄道(旧豊真線)は通つていないがポロナイスク(旧敷香)への鉄道は通つているとのこと、一年前にエプソンビルが建てられたこと、スーパーマーケットの所在地や買物の仕方、マイクロバスやタクシーの乗り方等の説明を聞きながらバスはスーパーマーケットの前で止つた。スーパーマーケットで夫々思い思いのお土産を買つた。小生は孫達へのクツキーや娘達へのスカーフ、マトリョーシカ等を買つて、促されるまま近くのレストランに入り皆とバイキング料理を食べべたが品数が少なく余り印象に残らなかつた。

午後一時五十分、再度バスに乗つてサハリン州郷土博物館へ向かつた。この博物館だけは昔の樺太庁博物館のまま使用されていた。余りの立派さに当時のソ連軍も壊す気になれなかつたのかと思うと安堵の気持が込み上げて来た。博物館の前に据えられている一基の狍犬の姿は老朽化してはいたが、日本文化の誇りを滲み出していた。博物館内部はロシア中心の展示方法であつた。間宮林蔵の肖像画も目立たない所では



あるが飾ってあったのはロシア側の良心の一片を見る思いであつた。旧南北樺太国境に置かれた標石も角が欠けた状態で保存されていたが、彫り画かれた菊の御紋が空しい過去を物語るように見えた。博物館の右手の公園にも弟達と一緒に足を伸ばしてみたが、第二次世界大戦に使用された戦車や大砲、米ソ冷戦時代のミグ戦闘機のほかに日露戦争に使用された「明治三十七八年戦役記念海軍大将男爵片岡七郎謹書」の銘のある大砲が展示されているのには些か驚いた。

見学後、午後三時二十五分にバスにて最後の宿泊ホテルのサンタリゾートホテルへ向かった。前庭には紅ばら、ゼラニウム、ペゴニアの植込みの美しい花壇のあるポーチに到着した。運転士のアナトリーさんと添乗員見習いの若者セミヨンさんに「オーチエニ・スパシーボ」とお礼を言つて別れを惜しみながら、一行は次々にバスを降りてホテルのロビーに集合し、夫々チェックインの手続きを済ませて同室の弟（秀臣）と一緒に部屋に入った。

予め決められていた日本サハリン同胞交流協会のサハリン



サハリン州郷土博物館（旧樺太庁博物館）を背景に

在住日本人会役員との懇親会のため、午後六時にホテル内のレストランに集まり、日本人会会長の奈良氏と婦人部代表の植松氏を囲んで歓談した。聞くところに依ると奈良氏は四十二歳で日系二世、植松氏は根つからの樺太つ子で八十五歳とのこと、奈良氏は温厚実直を絵に画いたような好男子であつた。植松氏は日本統治時代から今日まで生き抜いて来られた心の強さが小柄ながら年を感じさせない清浄な目差しのなかに感じられた。

植松氏は永い間当地の日本人の面倒を見て来られただけあつてお話が上手であつた。サハリンでは郊外に行くとダーチャ（別荘）が目につくので可成り裕福な方も多いのではないかとの問いに、これは政府の政策の一つで土地は無償で貸与して別荘は貸与された人が自力で建てて別荘地は畑として利用することが出来るとのことです。この政策は出来るだけ多くの人を僻地サハリンに定住させるための苦肉の策とのことで、殆どの別荘地では作物を植えて収穫物をバザールに持って行き、収入源にしているとのことです。独得なユーモアを混えて次のようなお話を聞かせてくれました。

ある日、暫く留守をしていた別荘の主人が自分の植えた馬鈴薯の収穫期が近づいたので別荘地に行ってみると頑強な鬚面の男が馬鈴薯を堀起こしていた。その男の癡猛な目線と会った途端、下手をすると殺されるかも知れないと感じたので、自分も薯泥棒に来た振りをして、「俺は左隅から掘るから、お前は右隅から掘れ」と言つて自分の畑の作物を半々に分けて事が終り、命拾いをしたという様な話は何よりの御馳走であつた。

今回のサハリン旅行最後の夕食会を斯様に楽しく過ごすことができたのは、この旅行を企画して下さつた全国樺太連盟の關係者の方々のお陰であることを沁々噛みしめていた。夕食の本格的なサハリン風ボルシチやロシア風鮭のムニエルの味は未だに忘れられない。午後八時過ぎに皆で再会を期して御一人をお見送りしてお開きとなり、夫々自由に旅情を惜しみながら自室に戻つた。小生は自室に戻る前に弟(秀臣)と霧雨のなかホテルの前庭に出てスナップ写真を撮り合つた。午後九時に団長の井本さんの部屋に集合し、家族同然の屈託ない楽しい雰囲気の中で談笑し昨晩以上に盛り上がった。午後十時過ぎ自室に戻り、弟(秀臣)がスパーマーケットで買ったヨーグルトを分けてくれたので、それを食べて就寝した。

八月一日(金)、午前四時に目が覚めたので洗髪、齒磨き、

鬚剃りを済まして五時二十分に未だ眠っている弟に声を掛けて荷物の片付けをして早めにスーツケースをドアの外に出し、弟と一緒に昨晚懇親会を行ったレストランに朝食に行った。上の弟(邦巨)も同室の副団長堀江さんと先に来ていた。背の高いウエイトレスが節電中の薄暗いなかで一人で給仕をしてくれていたが、何処か淋しそうな表情であつた。食後、部屋に一旦戻つて手荷物を持ってチェックアウト後、ホテルのポーチでバスを待つている間、玄関前の寒暖計を見ると摂氏十九度であつた。相変らずの霧深い曇日のなか迎えるバスが来た。腕時計を見ると七時二十分であつた。順次バスに乗り込み、イルマさんの話を聞きながらコルサコフ(旧大泊)に向かつた。嘗ての護国神社の跡地にはサハリン最大の六百床ある州立病院が建つていて、旧大沢病院は州立病院の分院として今も使用されているとのこと。

最近になってスパーマーケットの経営が韓国人にも許可されて、韓国系スパーマーケットがユージノサハリンスクに四、五軒建つたとのこと、サハリンプロジェクトによつて遊園地、病院等の公共の施設が次々と増設されていること、アメリカ村には五百人位のアメリカ人が住んでいて自国民だけの衣食住のための店を出して暮らしているが、電気、水道工事は地元の技術者に頼っている等の話に耳を傾けているうちに、右手に空港への道路標識を見て一路コルサコフへ直走

る。更にイルマさんの話が続き、無意識のうちに時間が過ぎ去った。

ユージノサハリンスク周辺は一九九〇年代は地代が無料であったが、此処二、三年土地の値段が上りはじめているとのこと。左手に唐松林が広大に広がっている所に差し掛かったときに耳を疑うような話を聞かされた。サハリンは松茸が多く、自由に松茸狩りができるのでバザールに売り出すためにその季節には松林を訪れる人が多いとのこと。値段はバケツ一杯の松茸が五百ルーブル（二千二百五十円）で、香味は日本産のものと全く変わらないとの話は未だに信じられない。これに関連して、もう一つ面白い話を聞かされた。フズモールイ工（旧白浦）では密漁を承知で鱧場蟹を漁ってバザールで一杯千ルーブル（四千五百円）で売って居り、夕方に買いに行くところ一杯分で二、三杯を御負けにつけてくれるとの話であった。

ずっと小生はバスの右座席に座っていたので右手をみると三本レールの鉄道が在った。この鉄道は広軌道と狭軌道の両方に使用できるようになって居るが未だ極く限られた区間でのみ使用されているとのこと、サハリン縦貫鉄道はコルサコフからオハまでであるが旧南樺太の古屯（パベージノ）以北は旧ソ連時代のもので小規模な軽便鉄道といわれる貨物輸送を中心とする列車が走っているとのことであった。嘗ての北

サハリンの首都アレクサンドルフスクまでは鉄道が通って居らず、昔の処刑地のまま寂れ果てた町になっているとのことであった。

八時前に右手にアニワ（旧亜庭）湾が見えはじめた。座礁した一隻の船が放置されたままになっている。この船は二十年前に台風で座礁した英国船籍のドイツ製の輸送船とのこと。途中コルサコフ発ユージノサハリンスク行の定期バスと擦れ違った。旧樺太時代からサハリンは山火事が多く、吹雪も多いことも話の中に混えて一行の追憶を誘ってくれた。

小生も学童期には良く山火事の話をお父と母が交しているのを耳にしたし、吹雪の激しい時は休校になって家に隠って凍てついた蜜柑を食べながら、空中戦で日本の戦闘機が敵機を撃墜する絵や軍艦の絵を画いて遊んだことが思い出された。その頃はドンパチの恐怖などは全く縁遠い軍国少年として純粹に育てられていたことを思うと、虚しさで胸が一杯になった。

コルサコフ港に近づくにつれて、旧大泊銀行はいまでも国立銀行コルサコフ支店として使用されていることや年々日本からの観光客が増えていることに加えて、イルマさんの身の上を少し付け加えてくれた。父親が三菱炭鉱で働き、仕事に事故で身体障害者となったにも拘らず自分を育ててくれて七十七歳で亡くなられたとのこと。韓国人でありながら日本

人として一生懸命働いて苦勞を重ねて亡くなられたイルマさんの御父上に対して心の中で冥福を祈った。

八時十五分、コルサコフ港に到着後、イルマさんは税関の入口まで見送りに来てくれた。その時、小生が懐に入れていた亡妻の写真を見せてイルマさんの仕草が生前の妻と似ていることを話すと嬉しげに手を振ってくれた。

此処からはフェリーで稚内まで帰るだけなので、出国審査も簡単に済むだろうと考えて列に並んだが、仲々捗らず急に疲れが出たような気がした。九時三十分頃、漸く、フェリー（アインス宗谷）に上船することができた。未だ船客の少ない二等室に弟達と三人で同じ場所に並んで座り、同行者だけでビールを飲み交わしていると、平和の船ツアーの旅行団七十数人が乗り込んで来た。忽ち二等室（一室十二人定員）が全室満員となった。平和の船一行が遅く上船したため、約二時間送られて出港することであった。

出港の瞬間を確かめに甲板に出たいと思ったが、座を外すと他の船客に陣取られそうなのでそのまま座っていることにした。近くに座った平和の船一行の一人で六十代と思われる女性が、亡き夏代姉に似ているのでつい話しかけてみた。北サハリンの原生花園を見に行ったとのこと。花は素晴らしく綺麗だったが、夜行列車のトイレが汚れていて閉口したと言っていた。

腕時計を見ると十一時二十分（現地時間）であった。邦兄弟が座を外して後甲板へ行つたので、小生も行ってみると丁度、ロシアの客船「イーゴリ・フラチジノフ号」が入港したばかりであった。十分位で引き返したが、邦兄弟は再びカメラを持って甲板に出て行つた。小生と秀臣弟は仮眠を取ることにした。向かい隣の三人の若者（一人は英国人、二人は日本人）がトランプに興じる声で仮眠を乱されたので小生は起きたが、秀臣弟はビールを飲み過ぎたのか眠り続けていた。邦兄弟が戻つて来て、亦、新たな客が乗り込んで来たことを告げた。

十一時四十五分、漸く出港を開始。邦兄弟は出港の瞬間をカメラに納めるためか、亦、甲板に出て行つたが仲々戻らないので小生は秀臣弟に声をかけて起こして番をして貰い、後甲板に出てみたがコルサコフ港は既に遙か彼方に遠ざかっていた。同行の加藤さんと大島さんとフェリーの後方に白波を立てる水脈を眺めながら、余りにも短かったホルムスク訪問の旅を話し合った。思えば次々と見て置きたかつた場所が脳裏に浮かんで来た。

生後半年で真岡に渡つて来た時の最初の官舎跡。小生の最も気に入っていた幼時に母が携ってくれた写真の背景になっている白系ロシア人の神父さんの居た教会の跡。今は亡き親友の後藤君と櫓に乗って跳んだ真岡中学校のジャンプ台跡。

戦時中、梅干弁当を風呂敷に包んで腰に括りつけて落狩りの行進をさせられた春風山等々、次回訪問は何時になるか判らないが、再び訪問できる日を祈りつつサハリンの島影が視野から消えた後も暫く北の海の彼方を眺めていた。

十二時四十分（現地時間）、隣に座って居られた平和の船一行の望月和子（名札）さんから全員に弁当が配られていると聞き、三人分受け取り、小生と邦巨弟は早速食べたが、秀臣弟は一時間位して仮眠から覚めて徐ろに食べ始めた。

食後、弟達はトランプに興じていた若者達と話をして暇を潰していたが、聞くところに依ると、三人の若者は英国から鉄道だけ利用してユーラシア大陸を横断してフェリーでサハリンに来て、見物よりも鉄道旅行そのものが目的で、稚内に着いたら列車で北海道縦断をして本州に向かうとのことであった。若さは美德と良く言われるが、将に斯様な体験がこの若者達の将来に役立って世界平和の礎となつて欲しいと思つた。

出港後三時間位経って、我々ホルムスク訪問団は井本団長を中心に集合して細やかな解散式を行った。無事にサハリン旅行を終えた喜びを分かち合い、次回も同じメンバーで訪問できる日を祈ってお互に今後の健勝を誓い合った。その後、小生は腕時計の針を二時間戻して日本時間に合せた。午後三時三十分頃、稚内港に到着後、フェリー到着の遅延を理由に

早めに税関を通して貰い、小生のスーツケースに入れてあげた秀臣弟の荷物を出して渡し、秀臣と邦巨弟は一緒に当地で一泊して帰るとのこと、小生は木村さんと平野さんと一緒にタクシーに同乗して、留萌で一泊して帰るといふ平野さんを稚内駅で下ろして空港へ向かった。

留萌といえば昭和二十年八月二十三日、その沖合は樺太からの疎開者を満載した客船、小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三隻がソ連潜水艦の雷砲撃を受けて沈没乃至大破して、多数の犠牲者を出した処である。平野さんはその御遺族であると伺った。思えば、今回の訪問旅行は家族的雰囲気である日々であったが、ドンパチで犠牲になつた方々に導かれた正念の旅であった。

稚内空港を午後五時三十五分発全日空機で、新千歳空港六時二十分着後、最後まで同行して下さつた全国樺太連盟理事（現在副理事長）の世話人、木村滋さんは札幌で一泊して帰京すること、一言お礼を述べて、サハリンでの数々の体験を回想しつつ満ち足りた心地で七時二十五分発、全日空機にて羽田へ向かった。

以上、今回の訪問旅行が余りにも印象深かつたので未熟な筆致ながら、訪問前の小生の心境や略歴をプロローグに「ホルムスク訪問記」を歌文集として、表記の題名にて本誌に掲載させて頂くことに致しました。